

小説 あらおし悠
挿絵 くく維きゃん



二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

妹はグラビア アイドル!

序章	
第一章	小悪魔アイドルの憂鬱
第二章	美人マネージャーとの初体験
第三章	アイドルのヌードとお口の奉仕
第四章	清纯派アイドルのスキャンダル
第五章	リゾートホテルでお楽しみ
終章	
	246
	193
	147
	105
	060
	017
	006

登場人物紹介

Characters



いずみりな 和泉梨奈

香澄梨奈として活躍するGカップラビアアイドル。弘樹の義理の妹にあたる。清純派巨乳というアンバランスな魅力でファンを魅了している。



こばやかわさき 小早川咲希

大手プロダクション所属のアイドルで、梨奈のライバル的存在。小さめのプリンとしたお尻がチャームポイントの小悪魔系キャラ。



いずみひろき 和泉弘樹

梨奈の兄。義妹がアイドルとして活躍していることを応援している。

ほうじょうまこと 北条真琴

梨奈をスカウトし、現在はそのマネージャーを務める。彼女自身も元々はアイドル歌手として活躍していた。



声が裏返る。柔らかい唇が、頸動脈にちゅうううと吸いついたのだ。鳥肌が立ったように全身がゾクゾクッと粟立つ。痺れるような快感は腰まで伝わり、ビクンと跳ねた勃起が、水着の股間に押しあてられた。

「やあん！」

反射的に仰け反る咲希。弘樹の胸に顔を埋め、恨めしそうに眼を細める。

「えっち」

「そ、それは、そっちのせい……」

文句が遮られた。彼女の腰が、膨張肉棒を揉み解すようにうねる。内側から熱いものが込み上げて、たまらず細い腰に両手を回した。助けを乞うように、しがみつくように、まろやかな丘を撫で回す。赤い水着の少女は、うっとりとした表情で熱い吐息を漏らした。

「ふふっ、小悪魔自慢のヒップよ。そう簡単に触っていいものじゃないんだから、ありがたく……いっぱい……あ……いっぱい触っ……触って……」

甘い喘ぎで囁かれ、弘樹の理性も白く霞む。誘い込まれるように、露わになった豊かなお尻に手を伸ばし、白い双丘を夢中で撫で回した。

「……こ、これが女の子のお尻？ す、すごく……すごく柔らかい……」

「こっちは……硬いわ……」

咲希も、ジーンズの前を膨らませているものに指を這わせた。熱い息を吐いて、困ったように眉を寄せた表情で、じっ……と弘樹の眼を見詰めている。互いの瞳が吸い寄せられ

るように近づき、吐息が混じりあい、唇が触れそうになって――。

まるでフラッシュを焚いたように、脳裏に妹の顔が浮かび上がった。困ったような、泣いているかのような梨奈の顔が。弘樹は咲希の唇から逸れ、咲希の首筋に吸いつく。

「あー！」

さっき弘樹の首を舐めたお返しと思ったのだろう。捧げるように首を差し出し、歡喜の声を上げる。その、耳をくすぐる甘い声が、罪悪感で弘樹の胸を締めつけた。梨奈を気にする必要はない。血が繋がっていないとはいえない、妹は妹。誰と戯れようと、罪の意識を覚えるいわれはないはず。それともこの痛みは、咲希に対するものだろうか。恋人になることを拒んでおいて、こんないやらしいことをして。

（俺、何してるんだ。この娘はアイドルで……この場所は、さっきまで、梨奈が……）

頑張つて、眩しい笑顔を振りまいていた砂浜の上で、他の女の子の肌をまさぐっているなんて。それなのに、罪悪感でいっぱいなのに、罪の意識を覚えるほど、熱く滾る欲情に支配された下半身が快感に疼いて堪らない。

「くああ、か、身体が……勝手に……！」

女の子とは、軽いキスをしたことがある程度。初めて触れる少女の肌に、思考が麻痺する。頭より身体が先に彼女を求め、折れてしまいうように細い腰を抱いて仰向けにひっくり返した。腕枕をするように肩を抱きながら、裸のお腹に手を這わせる。本当は、ほどよい実りを見せる乳房に、早く手を伸ばしたい。しかし、初めて女性に愛撫をする身では、許

可なくデリケートな部分に触れるのをためらってしまふ。

いつまでも同じところで留まっている弘樹の手に、咲希の方が焦れてきた。もどかしげに身体を振って太腿を擦り合わせ、早く先に進めと合図を送る。それでも経験不足な童貞の弘樹には伝わらないと知ると、ついに言葉にしておねだりしてきた。

「ばかあ、お腹ばっかりい……もつと触りたいところ、あるんでしょお？」

小さな舌で唇を湿らせながら、トップスをそつとめくり上げる。念入りに磨き上げたように滑らかな乳房が、ほんの少し露わになる。芸術的に括れた腰から続く、緩やかなカーブを描いて現れる、白い丘。下乳の丸みが男の目に晒され、ほんのりと桜色に染まっている。その危うい色香にゴクリと唾を飲み込んで、誘惑されるままトップスの中に指を潜らせた。震える指を必死に落ち着かせながら、まだ姿を見せない部分を可能な限り優しく包む。掌に感じる、プリッととした弾力の愛らしい肉の豆。ぷっくり勃った、小さな乳房。

「や……そこ……ふあん……」

小指の爪ほどもない可憐な肉芽をコロコロと転がされ、咲希は切なそうに背中をくねらせた。感じている顔を見せるのが恥ずかしいのか、小さく握った拳で吐息を隠す。もつと彼女を感じさせたいという気持ちだが、弘樹の愛撫に余裕を生んだ。欲情で重くなった、たつぷりした乳房。掬い上げるように揉みしだき、乳首を二本の指できゅつと摘んで、しなやかな肢体を小魚のようにピチピチと跳ねさせる。

「ひゃあん！ ち、ちくび、ぴりぴりするう！」

弘樹の胸に顔を埋め、くぐもった声で悶える小悪魔アイドル。その手が、蜘蛛のようにジーンズの腰を徘徊し、前に回ってファスナーに指を掛ける。窮屈な空間から解放された肉棒が、バネ仕掛けのようにいきなり飛び出した。

「——ひッ！」

まるで蛇にでも出くわしたように、咲希が、か細い悲鳴を上げる。大胆に振舞って弘樹を惑わせていたのが嘘のように、身を竦ませてプルプルと震え出す。

「もしかして、こういうの初めて？」

咲希が恥ずかしそうに頷いた。芸能人だから、こんな経験が豊富なのだと思い込んでいたが、実際は、なんとか弘樹の気を引こうと、えっちな女の子を演じていただけらしい。

「ダメ……わたし、もう……」

いざ実物を目にしたら、緊張の糸が切れてしまったのだろう。すっかり怖気づいて、純情な女の子の正体を晒してしまっている。

（女の子がここまで勇氣を出したのに、俺ときたら……）

咲希に押されっぱなしだった弘樹だが、急に可愛くて仕方なくなつた。きゅつと抱き締め、首筋に顔を埋める。海の塩気と、ほんのり、汗の味がした。テレビやグラビアでは決して知ることのできない、本物のアイドルの芳しさに、舌でゾロリと舐め上げる。

「おいしい……汗、おいしいよ……」

「や……バカあ……変態い！ そ、そんな首……ぺろぺろしたら、わたしい……」

咲希は、全身の力が抜けてしまったようにクネクネと首を揺らして、舌に身を委ねるし
かできない。彼女が受身になった分、弘樹は大胆になれた。指先で刷くように脇腹をくす
ぐり、細いウエストをヒクヒクと痙攣させる。咲希の恥ずかしそうな顔に、弘樹は意地悪
をしたくなつた。狼狽する咲希の手を取って、しゃくり上げる肉棒に導く。うつすらと涙
を浮かべ、いやいやと小さく首を振るのを無視して、強引に握らせた。ためらいがちな少
女の手にも、ペニスは悦びでピクンと跳ねる。

「こ、これが……おちんちん、なの？ 弘樹の？ すごく、硬くて……ドクドクって、あ
あああ……熱い……動いてる……！」

まだ異性の性器は怖いのか、軽く触れているだけで、握り締める気配はない。しかし離
そうともしていない。弘樹は震える咲希を胸に抱き寄せたまま、緊張と欲情の汗でしつと
りと湿った太腿を、焦らすように撫で回した。感じているのか、ほっそりとした脚の筋肉
が、電気で痺れたように引き攣って震える。

「触って、いい？」

咲希は答える代わりに、弘樹のシャツをキュッと握った。それを合図に、ぴったりと閉
じられた内腿に、掌を割り込ませた。瑞々しく、弾力のあるすべすべの内腿を撫で回し、
中心部まで一気に移動させる。秘部に迫った指先に身体を強張らせ、接近を拒むように太
腿で手首を挟む。

「あッ！」

華奢な鎖骨をペロツと舐めると、脚の力が緩んだ。だが、彼女の最も秘められた部分に最接近すると、汗とは違う、油のようなぬめりが指に絡みついてきた。

(これって……………女の子の……………!?)

彼女の下半身から、ツンと刺すような、それでいて甘い匂いが漂ってくる。手を引き抜いてまじまじと観察すると、指にたっぷりと含ませた少女の滴りは、夕陽にキラキラと輝いていた。蜜蜂が花の蜜に誘われるように、弘樹は無意識のうちに舌を伸ばす。

「な……………何を舐めてるのよ……………!」

「んっ……………じゆるっ……………おいしいよ、これ」

少し塩味。しかし弘樹の舌には、今まで飲んだどんなジュースよりも美味に思えた。羞恥で真っ赤になる咲希に見せつけるように、自分の指をびちゃびちゃ舐める。

「バカバカバカッ! このヘンタイ!」

仕返しに、軽く触れているだけだった咲希の手が、ペニスをギュッと握り潰した。

「つあぁっ……………!」

「あ……………ごめん! い、痛かった……………?」

弘樹の反応に驚いて、せっかく握ってくれた手を離してしまふ。

「違うよ。気持ちよかったもんだから、つい」

「い、今のが、気持ち……………いいの?」

痛めつけるつもりだったのに気持ちいいと言われては、さすがに戸惑いを隠せない。

「そうだよ。だから、もっと、してくれるかな？ 今度は、手を動かして」

緊張で喉がカラカラだ。声が掠れて、ひっくり返る。人気アイドルに、とんでもないことをさせている自分の姿に恐れおののきながら。

（この娘にもたくさんのファンがいるのに……こんな裏切り行為みたいな真似を……）

それなのに、罪悪感はずいぶん美少女アイドルにペニス握られる甘美な背徳感に押し流され、いとも簡単に優越感へと変換されてしまう。催促するように腰を動かしてしまう。

「こ、こう？」

一度握ってしまったおかげで慣れたのか、殊勝な顔でコクンと頷き、今度は最初から力を込めてきた。処女とはいえ、彼女も知識はあるらしい。手を肉の幹に沿わせるように上下させ、一定のテンポで扱ってきた。

「もっと強くしていいよ……そう、そんな感じ……」

さすがというべきか、努力家を自認するだけあって学習能力が高い。ひと扱きするたびにスピードが上がリ、強弱をつけることを覚え、下半身を快感の渦に巻き込んでゆく。歯を食い縛っていないと、情けない声が漏れてしまいそうだ。

彼女にばかり奉仕させているわけにはいかない。弘樹は再び彼女の脚に手を伸ばした。ぬめりは量も粘り気もさらに増して、大洪水の様相を呈している。

（すご……染み出てる分だけで水着がこんなに湿って……）

咲希も、つるんとした亀頭まで撫で始めた。甘い摩擦に、下半身が追い詰められる。ペ

ニスを抜く手に急かされるように秘所に触って、驚いた。ほんの指先で確認できるほど、お漏らしをしたかのようにグッシヨリ。湿った布地が内側の縦線を浮き上がらせている。

「んふあ……は……やあん……恥ずかし……」

「じゃ……やめる？」

もちろん彼女は首を横に振り、愛撫のペースを速めた。彼女の手指が与えてくれる快感に突き動かされ、お腹のゴムを潜って水着の中に手をつ突っ込んだ。そこは、興奮で蒸れた熱帯の森。しつとりと露を含んだ草むらが絡みついて、弘樹の指を出迎える。水着姿を披露する機会が多いため、きちんと手入れがされていて、量も面積もほんのわずか。

「あ、おちんちん、また大きくなった……!？」

咲希が驚嘆する。弘樹自身も驚いた。写真集で澄ましている彼女や梨奈。少女たちが陰毛を手入れしているところを想像するだけで、勃起が脈動しながら膨張を続ける。妄想を振り払うように、少女の下着の奥の奥、咲希の秘裂を求めて恥毛を掻き分けた。

——ちゆくッ……。

「ひッああああん！」

硬く口を閉ざしていた処女の門がわずかに綻び、ねっとりした淫唇が、弘樹の指を包み込む。ついに到達したそこは、とろとろの愛液を湛えた泉。指が溺れそうなほど自分の愛撫で感じてくれたのかと思うと、愛おしさで胸がいっぱいになる。

「ひゆくああん！ はみゆう……。さ、触って……擦ってえ……」

ペニスを夢中で撫でながら、うわ言のように咲希が愛撫を欲しがった。柔らかい粘膜を、吸いついてくる膣口を、ぐちよぐちよに掻き回したくなる衝動が腰の奥から突き上げてくる。年の差で冷静さを装っていた弘樹だったが、初めて触れる未知の世界、女の子の最もデリケートな部分を前にして、もう、興奮を制御できない。

——ちゅぷっ、くちゅくちゅくちゅっ、じゅぷ、ずぷぷぷっ！

指先でくすぐるように秘貝をノックし、溝に沿って、指の腹をできるだけ優しく滑らせた。指先が身を硬くするクリトリスを掠め、擦り、彼女の身体を跳ねさせる。処女と聞かされていなかったら、衝動に負けて、もっと乱暴に扱っていたかもしれない。しかし男の愛撫を初めて受ける彼女には、それでも激しすぎる刺激だった。

「ひあ！ あ！ そ、そんなに強くしたら、わたし……らめっ……ひやあああん！」

腕の中で暴れる彼女を必死に抱き締め、懇願とは反対に愛撫を強める。咲希も負けじと男根を苛める。快感が弘樹の背筋を走り、肉棒の先端から漏れた先触れ液が、少女の可憐な手を汚した。

「へ、変な臭いするよお……。おちんちん……おちんちんの臭い……んはああ……」

淫靡な空気が潮風と混ざり、岩に囲まれた狭い浜辺に充満し、咲希も弘樹もその匂いに酔い始める。ぐちゅぐちゅくちゅくちゅと、恥ずかしい粘着音が二人の股間で鳴り響く。

「咲希ちゃんのここ……ぐちゃぐちゃって鳴って、いやらしく濡れて……」

「あ、あなたのおちんちんだって、こんな、こんなに濡れてるじゃない！ こ、こんなに



ぬるぬるってして、か、硬くて……ひゅあぁん！ き、気持ちいい！ おちんちんも、わたしのあそこも……こ、こんなに、こんなにひいいいッ！

肉棒が吐き出す粘着液を指に、手に、擦り込みながら、生臭い性臭を胸いっぱい吸い込む。弘樹も彼女の胸の谷間に顔を埋め、少女の体臭を心ゆくまでたっぷり味わう。二人は相手の匂いを楽しみながら、競うように相手の股間で、粘った音を大きく奏でた。

——じゅぷっじゅぷっ！ ぐちゅっぐちゅっ！ じゅびゆるッ！

「いやらしい音お……匂いい……！ こ、こんなのが気持ちいいなんて……わたし……おかしい……おかしくなるう……身体が浮く……わたし、どこかにイッチャウ！」

「お、俺も、もう……ああ、くそッ、我慢できないッ……！」

まるでセックスしているかのように腰を振る。肉棒の限界を感じ、少女の愛撫が激しくなった。鋭い愉悦が全身を貫き、爆発寸前の精液が肉棒を最大限に膨らませる。

「で、出る……！ こ、このまま……このまま出すよ？ ああッ出る！」

無我夢中で手首を動かす咲希は、弘樹の警告を理解しているのかどうか。

「いいよ！ 出して！ いっぱい出して、わたしに見せて！」

「本当にッ……いいんだな!? 俺……もう、ああ……ああ出る、出るッ!!」

——ドプッ！ ドプドプドプウッ！

最初の一撃が咲希の綺麗な臍を汚した。青臭い精液をぶっ掛けられ、彼女の絶頂にもスイッチが入る。

「あああ！　すごい……おちんちん、わたしの手の中でドクドクいつてるう！　……わたしも……わたしも……あ、い、イク……イク……！　も、もう……はあああッ！　あああああッ!!」

弘樹に続き咲希が達した。しなやかな身体を硬直させ、伸び上がるように何度も背中を反らせる。それでも精液を吐き出し続けるペニスは離さず、手首が白濁粘液で真っ白になるまで、扱き続けた。

「はあ……はあ……はぐっ……ん、はあああ……」

水着少女がビクッビクッと絶頂痙攣で身体を跳ね上げながら、息も絶え絶えに酸素を貪る。抱き締めると、彼女も弘樹の背中に腕を回し、ギュッとしがみついていた。

「……どうしよう」

肩が、声が。そして、目尻には、玉のような涙が、小さくふるふると震えている。

(もしかして……イッたせいで頭が冷えた?)

だが、彼女の後悔は、弘樹の想像とは反対の意味だった。

「どうしよう……今日だけでもいいって思ってたのに……こんなに気持ちよくされて……あたし……あなたのこと、諦められなくなっちゃった……」

すっかり夕闇に沈んだ浜辺で、波の音を聞きながら、欲情で乾いた唇を小さな舌でペロリと舐める少女は、弘樹を惹きつけてやまない、小悪魔の表情をしていた。

「ほ、北条さ……む……！」

言葉が遮られる。戸惑う唇を、唇で塞がれる。口腔内に吐息が流れ込んでくる。それと一緒に、ぬめった舌がにゆるんと侵入して、弘樹は眼を白黒させた。

「こ……こんな……ま、待って……むあ、んむっ……」

横抱きにしていた真琴が覆いかぶさってきた。弘樹の胸で、ブラウスに包まれた小振りな乳房がふにゆりと歪む。まるで嘔みつくように右に左に顔をくゆらせながら、何度も弘樹の唇を啄ば^つんでは、唾液に濡れた舌を挿し込む。

——にゆるちゆぶ、ちゆるちゆる、ジュル、ぬるじゆぶつ、じゆぶ！

二枚の肉片が絡み合う粘着音が、頭の中でこだました。弘樹も、女の子と付き合った経験くらいある。唇が触れ合う程度のキスもした。だが、こんな激しい口づけは初めて。ピシク^{ピシク}の肉片が抉るように口腔内を掻き回す。ざらつく表面が擦れあって、背筋にゾクゾクとした快感が走る。

真琴のキスは唇を離れ、頬や脛、鼻の頭まで、顔面をくまなくさまよった。芳しい唾液の匂いに、クラクラと目眩^{めまい}を起こしてしまう。

「ぶあっ……。ど……。どうしてこんな……」

「……ごめんなさい……。どうしても眠れなくて……。不安でたまらないの！ じっとしてられないの！ 身体が熱くて……。自分でも抑えきれない……！」

弘樹も受験の時は、将来が見えなくて、焦燥感から何度叫び出したくなったことか。も

ちろん、今の真琴に比べればそんなものが小さな悩みであることくらい承知しているが、暴れたくなるような、制御できない衝動は、よく理解できる。

「でも、だからって、こんなのは……。俺なんかで満足しようとししないで、もっと自分を大事にしてください」

陳腐な常套句だと思う。本音では、弘樹だって彼女を抱きたい。だが、今の真琴は自棄を起こしているだけだ。こんなその場しのぎで快感を求めても、後で後悔するに決まっている。彼女に、妹の恩人に、そんな真似はして欲しくない。しかし、そんな心情などお構いなしに、真琴は弘樹の身体を貪ってきた。

「だから、あなたにお願いしてるの……。他の誰でもない、後悔しなくて済む人に！」
ボタンを弾き飛ばささんばかりの勢いで、弘樹のパジャマの前を開く。

「怖い……。梨奈が、私みたいになっちゃうんじゃないかって……」

「ま、真琴さんみたいになつて……。？ おあう!?」

男の乳首を甘噛みし、舌で舐り、唾液まみれにしてからズズッと吸引する。

「ちゅ……。じゅる！ 私も……。ぺろぺろ、じゅぷ！ 昔はアイドルをやっていたけど……。んちゅッ。その頃付き合っていた男性とのことが、事務所にはばれて……」

彼女の綺麗な眉が曇った。辛い記憶に耐えるかのように、弘樹の胸に頭を預け、ちゅぱちゅぱと夢中で吸いつく。

「その男性は、ライバル事務所のスパイだったの。まだ子供で、世間知らずの私から色々

と情報を聞き出して、そのせいで人気のタレントを何人も引き抜かれて……」

「はぐっ……おああっ！」

反対側の乳首もポニーテールにくすぐられ、たまらず彼女の頭を抱き締めた。今度は自分から、勃起を彼女の下着に擦りつけてしまう。

「まんまと騙された私は、あっさりと事務所をクビになって、アイドルは廃業。ふふ……バカみたいでしょ？」

「そ……そんなこと……あう！」

胸の肉をコリッと噛まれた。自分を蔑む彼女の眼が、悲しい。

「だから、もう仕事で失敗はしないって決めたのに……。梨奈だけは、大事にするって誓ったのに、私は……私はまた……ッ！」

はあはあと、まるで獣のような息づかいで、テラテラと光る跡を残しながら舌を這わせてくる。胸から腹へ、彼女の顎が、ズボンを盛り上げる勃起の先端にこつんと当たった。喉を鳴らし、パジャマのズボンに手を掛ける。

弘樹には、抗う気はもう少しも残っていなかった。今の彼女に言葉は通じそうにない。快感に流されているだけかもしれないと心の片隅で思いながらも、彼女を慰めようと覚悟を決める。隣の部屋で寝ている梨奈は気になるが、彼女の疼きを静めるためだと、自分で自分を納得させた。

「本当に……俺でいいんですね？」

真琴は答えない。トランクスと一緒にズボンを引き下ろす。淫熱を帯びた股間が、夜の冷気に晒されて、少しだけ気持ちがいい。むわっとした男の臭いが広がって、彼女の鼻をひくつかせた。年上の女性は、熱に浮かされたように呆けた顔で、天井を指してそそり立つ肉のロケットを凝視している。

「北条さん、これが欲しいの？」

「欲しい……です……。欲しい……たまらない……！」

真琴は握ったペニスを自分の顔に引き寄せると、まるで飢えた野獣のように大口を開けて、何の躊躇もせずに頬張った。

「ふぐッ！」

あまりにも勢いよく飲み込んだせいで、喉を突いてしまったようだ。涙目になりながらも口から吐き出そうとはせず、捻り込むように、奥へ奥へと導いてゆく。鋼鉄のように硬くなった弘樹の分身に、舌が巻きつき、温かい口腔粘膜に包まれる。

——「ずずっ……ずぶぶぶ……じゅるっ！」

幹に沿って流れ落ちる唾液を啜る。その下品な音に、弘樹も真琴も興奮してきた。

「おいしいですか？ 俺のチンポ」

「おいひ……おひんひん、おいひい……！」

吐き出した硬直肉棒にねっとり舌を押しつけ、根元から亀頭へとなぞり上げる。肉口ケットの頂点に辿り着いた唇が鈴口にキスをしたかと思うと、まるでストローのように、

湧き出る先触れの粘液をズズズッと吸い込んだ。

「はうあ！」

喉を仰け反らせて亀頭を吸われる快感に耐える。射精感が差し迫る。

（で、でも今は、北条さんを満足させなきゃ……俺だけが気持ちよくなるわけには……はうっ……く、つうわあああくっ！）

唇で締めつけ、激しい抽送を始めた真琴を決死の思いで引き剥がす。

「やあ！ もっとちようだい！ おちんちん舐めさせて！」

恥も外聞もプライドもなく、駄々をこねるようにペニスにしがみついていた。クールな仮面を脱ぎ捨てて、一匹の発情する牝へと完全に成り下がっている。

「お、俺も、北条さんを……」

愛撫をしようと伸ばした指が、まるでフェラチオのようにしゃぶられた。横目で弘樹の表情を窺いながらペニスを抜く。彼女は、啞えた指を十分すぎるほど唾液で濡らすと、腹に跨ってきて、その手を股間へと導いた。

「あ……！」

いつの間に下着を脱いだのか、何の障害もなく、サラサラの草むらに指が埋もれる。しかもその先は、ぬぶつと音がしそうな深いぬかるみ。指をしゃぶる必要などなかったのはと思えるほど、欲情の汁を溢れさせていた。

「熱い……です」

小陰唇の濡れ髪に包まれた指先が、彼女の入り口を探り当てる。最初から主導権を握られっぱなしなのが癪だった弘樹は、焦らすように膣口付近の粘膜をなぞった。涙を浮かべた眼が、もつと強く触って欲しいと訴えている。

「北条さん、気持ちいいですか？」

「いい……気持ち、いい……。ひ……弘樹、くうん……」

「ああ……真琴さん……真琴さん！ 真琴さんのこころ、熱くて、ぬるぬるで、とつてもいやらしいです。いやらしくて……素敵ですよ……」

身体に跨る彼女の肩を抱き寄せ、股間を弄りながら囁くと、真琴は悩ましい声で喘ぎながら身悶えた。自ら腰を振って、獲物を捕らえたイソギンチャクのように、啜え込んだ指を、何の抵抗もなくズブズブと飲み込んでゆく。

「真琴さんっ……ああッ!？」

責めているのは弘樹のはずなのに、蠢く蜜肉に包まれた指から快感が流れ込む。まるで菌のない口に食はまれるようだ。上の口でもちゅぱちゅぱと唇や舌を啄ばまれ、彼女の手の中のペニスがズキズキ疼く。

真琴の腰が小さくくねり、ズル……と指が引き抜かれた。入れ代わりに、食欲に鎌首を伸ばす勃起ペニスを、彼女の秘裂にあてがう。

「あつっ……つあ！」

ヒリヒリと痛いほど過敏になっている亀頭に、淫裂の粘膜が「チュパッ」と口づけをし

た。淫熱を孕んだ腰が降りてくる。灼熱の肉孔に包まれる。

(ああ……入っていく……。飲み込まれる……。俺のが、女の人の膣に……！)

こんな形で童貞を卒業するなんて。そんな感慨も、ほんの一瞬。ぐっと落とした腰の中に、淫欲ではち切れそうな肉棒が、全て、一気に飲み込まれた。

「んく……くううう……」

歡喜と苦悶の表情を浮かべながらポニーテールを振り乱し、弘樹の胸に手をつけて、体重をかけ、膨張肉柱で膣口を拡張する。

「お……うあ！」

「きゅあああッ！ んくああああああくッ、あああああッ!!」

弘樹の呻きは、真琴の悲痛な叫びに掻き消された。背筋を強張らせながら、それがまるで自分に科せられた罰であるかのように、女陰を荒らすペニスを肉の隘路あいろに無理矢理押し込み、激しい痛みを甘受する。

「ひつく……うくつ……。もつと……もつと痛くして……私を苛めて！」

梨奈に対する罪悪感を苦痛で贖あがなおうとしている。弘樹にも、その気持ちは痛いほど理解できる。しかし。

「ダメだ……よ。そんなに、自分を……いじめ、たら……」

弘樹もまた苦痛と快感の狭間に呻き、声が途切れ途切れになった。男性を受け入れるのは久しぶりなのだろう。彼女の締めつけは強烈で、ペニスが絞め殺されそうだ。そのくせ

ぬるぬるの濡れ媚肉は温かくて、柔らかくて、複雑な膣壁に肉幹が包まれる感覚は、手や口とはまるで次元が違う気持ちよさ。やけくそ気味の腰使いがペニスの裏筋や亀頭の力りを激しく擦り上げ、挿入直後に射精しなかったのが不思議なくらいの快感に気が遠くなりそう。だが彼女の方はいえ、やはり苦痛と苦悩の色ばかりが目立つ。

「せっかく、こんなことをして、るんだ、から……真琴さんには、もつと……んあ……気持ちよく、なつてもらわなきゃ」

罪悪感に苛まれる真琴にしてみれば、それどころではないかもしれない。数秒前まで童貞だった身で偉そうなことは言えないが、いくらなんでもこんなセックスは可哀想だ。

「でも、でも私……！」

「お、俺に、任せてください」

今にも果ててしまいそうな危機感に歯を食い縛りながら、騎上位で腰を振る真琴のブラウスのボタンを外した。はらりと開いた隙間に、快感に震える手を伸ばし、咲希よりも小振りで、お椀を伏せたような綺麗な半球を、下から掬い上げるように揉みしだく。

「ひゅあん！ お、おっぱい、揉んじやダメえ！」

アイドル時代に鍛えられたのか、悶える声も鈴を転がすように澄んでいる。予想外に可愛い喘ぎ声に、脳が痺れてしまいそう。弘樹と胸を合わせるように倒れた真琴の顔に、ほんのりと朱が増してくる。

（この調子で、気持ちよくなつてくれれば……）

膺以外の性感帯を刺激され、多少は苦惱よりも快感が勝ったのかもしれない。他にも感じる部分はないかと探りながら脇腹をつつくと。

「ふやん！ はやあああああん！」

と甘い声を上げて身体をくねらせる。しかしこちらは、気持ちがよくてよがっているというより、単にくすぐったいだけのようだ。

「それじゃ、こっち」

脇腹から、お尻に手を滑らせる。こちらも小振りながら、パンパンに空気を詰めたボールのように弾力があり、溪谷の底には小さなすぼまりが隠れているはず。だが、おちよほ口に触れようとすると、咎めるような眼で睨まれた。真琴のような美人にそんな目で見られるのも悪くないが、はずれが二連続で続き、弘樹は少しばかり焦りを覚える。次のポイントを探そうと、お尻の割れ目から、背筋をつつ——となぞり上げると。

「ひゅわあああああつ!!」

ぶるると身体を震わせ、眼を見開いて仰け反った。股間が飲み込んでいるものを根元からキユウウツと締め上げて、弘樹は思わず呻きを漏らしてしまう。淫裂からドプツと溢れた愛液が、繋がって絡み合った二人の陰毛をしとどに濡らした。

「しえ、しえなか、らめええええ〜！」

あまりに感じすぎて、呂律が回らなくなる。表情も蕩けて、唇の端から垂らした涎が弘樹の胸で水溜りを作った。普段キリッとしているだけに、ふにゃふにゃの真琴が可愛らし

い。面白がって何度も背中をなぞってしまふ。

「しよ、しよんなに、しえ、しえなか、さわったらあああつ！」

背中を苛める指に対抗するように、真琴が一層激しく腰を使い始めた。前後に左右に、淫肉棒を根元から折るような勢いで振り回し、すっかりほぐれた膣肉で擦り上げる。

「ま、真琴さ……激しすぎ……っ！」

唇で口を塞がれた。二人は抱き合ったままゴロンと転がり、上下を入れ替えた。上になつた弘樹は自由が利くようになり、キスを交わしながら真琴の太腿を持ち上げた。腰をぶつけるようにピストン運動の速度を上げ、ズンズンと彼女の奥を突きまくる。

「んみゅー！ んぶあつ！ ひゅわああああん！」

首を激しく振ったせいで唇が外れた。唾液を飛ばしながら真琴が喘ぐ。

「こ、こんなに脚、広げて……やあああ、恥ずかしい！ もつと、もつと突いてえ！」

羞恥が彼女の正常な感覚を狂わせていた。弘樹も初めての女体に抑制が利かない。彼女の恥肉に夢中で男根を擦りつける。熱いぬかるみに包まれて、ペニスが溶けてしまふそうだ。半ばめくっていたブラウスを完全にはだけ、形のいい乳房を露わにした。見事な半球を象つた頂点で存在を主張する、奥ゆかしい膨らみの割には大粒の肉蕾。小刻みに腰を振りながら、色づきがよくておいしそうな果実にしゃぶりついた。

「はッきゅああああん！ お、おっぱい！ そ、そんな……ちく、ちくび舐められたら……いいひっ！ き、気持ちいいいいいいいい！」

いつの間にか、真琴が素直に快感を叫んでいる。大きく開いた脚を爪先までピンと伸ばし、弘樹を胎内奥深くまで飲み込もうとしていた。

「おちんちん、いい……お願い、激しくして……私が壊れるくらい、激しく突いてッ！」
もう自分を苛めるためではない。肉の欲求に従って、快感を貪ろうとしている。滑らかに、淫らに腰を波打たせ、弘樹を迎え撃ち始めた。

「いい……いいです、真琴さんの膣、ほあああああ、とつても気持ちよくて……あ……うあああ……!？」

「出ちやいそうなの？ あん、わ……わ、私の、膣、につ、出しちゃうのね！」

ニンマリと快感に蕩けた笑みを浮かべる真琴。冷静で事務的だった彼女が見せる淫らな顔に、ゾクゾクッと鳥肌が立つ。どちらが責めているのか分からないほど、腰と腰がぶつかり合い、性器と性器を擦り合わせる。

「私……私、……こんなに気持ちよくなるなんて……ふああああ……あああッ！」

「イってください！ お、俺も、もう……！」

「ふきゅっ……きゅあッ！ んきゅわああああッ！」

真琴も限界が近い。それでもまだまだどこかに羞恥が残っているのか、噛み締めた唇から意味不明の喘ぎが漏れた。

「もっと声を出して……もっと感じて！」

男根の中でも白いマグマが沸騰して、噴火が目前に迫っている。先に果ててしまうと思



「やだやだ、おにいちちゃん、恥ずかしいよお……！」

イヤイヤと必死になって首を振る。しかし、外が気になって大きな声を出せないのはいいことに、必死の懇願も聞こえない振りをして、若さに満ちた内腿へ、肌理細かい肌を味わうように、ねっとりとして、じつくりと舌を這わせた。

緊張から滲み出した汗を、舌先でツーッと舐め上げる。すると、驚くほど滑らかな内腿の筋肉が、まるで電流を流されたかのようにヒクヒクと痙攣した。

「ひ……ひゅわあああつ!? く、くすぐったああい！」

身体を振って暴れる腰をしつかりと抱え、ニーソックスを膝まで降ろしながら、脚の付け根と膝の間を思う存分舐め回す。その間隔を次第に狭め、少女の中心へ、秘密の花園へと近づいてゆく。アイドルにしてはシンプルで何の飾り気もない白い下着が、湿り気で肌にピタリと貼りついて、その下に隠された秘部を、縦に裂けた一本の筋と会陰部の形を、うっすらと浮かび上がらせた。

「あ……ああ……！」

期待と、不安の色を浮かべた瞳が、兄を見下ろしている。淫熱視線を感じながら、下着の中心にゾロリと舌を這わせた。ザラザラした布地の感触に、微かに香る女の子ジュースの匂い。脳髓を溶かしてしまいそうな甘い芳香に、クラクラと目が回る。弘樹は、沁み込んだ愛液を吸い出すように、クロッチ部分に無我夢中でむしゃぶりついた。

「ひゅわあああああああ！ そ、そんなとこ、おしゃぶりしちやダメエッ!!」

「ん……いつも、俺のを舐めてくれてるじゃないか。だから、これは、じゅる……お返しだよ……ちゅるるっ！」

「や、やあん！ そ、そんなのいいから……恥ずかしから、あ……あッ！」

肩に担いだ脚の踵が、弘樹の背中をポカポカと蹴りまくる。しかしそんな弱々しい抵抗で、肉欲の獣と化した今の兄は止められなかった。

「梨奈……。梨奈のここ、見たい。見てもいいだろ？」

肩が大きく上下するほど息を荒げ、唾液と愛液でグシヨグシヨになった下着に手を掛ける。傍から見たら完全に、いたいけな少女を襲う変質者だ。

「いや……。本当に恥ずかしいの……。見ないで、お願い……」

両手で顔を覆って、今にも泣き出しそうに声を震わせる。しかし、脚を開いて下着を見せたまま、決して逃げようとはしない。

「脱がせるよ……」

できるだけ優しく声を掛け、それでも興奮を抑えきれずに、妹の一番大事な所を守っている頼りない布切れを、宙に浮いたお尻の丸みに沿ってツルンと一気に剥き去る。

「きゃああああッ！」

悲痛な叫びと共に、股間から、柑橘系のような、甘酸っぱい芳香が鼻孔に広がった。弘樹は目の前に広がる景色に感嘆して、思わず生唾を飲んだ。もどかしげに右の脚から下着を抜いて、左の足首に引っ掛けたまま、その芳醇な匂いを胸いっぱい吸い込む。だが梨

奈は、慎ましい佇まいの秘部を兄の眼に晒しながら、嗚咽を漏らした。

「やだ……見ないで、見ないで……。おにいちちゃんに嫌われちゃう……」

「どうして？ この前は自分から見せてくれたじゃないか」

「で、でも………：梨奈のあそこ、変じゃない？ おかしくない？」

妹の秘められた造形美に、溜め息が出た。肉厚の秘貝は見事な左右対称を形作り、まるでリップクリームでも塗りたくったように、キラキラと、テラテラと輝いている。普段はピタリと口を閉ざしているであろう、ぼつてりとした秘唇は、ほんのわずかに綻んで、サーモンピンクの粘膜を覗かせていた。それを親指の腹で優しく開くと、大量の透明な淫蜜がどぷつと一気に溢れ、滑る小川がお尻の穴まで流れ出す。

「どこが変なものか。……綺麗だよ、梨奈」

複雑な形状の小陰唇は、滾々と湧いてくる蜜を泉のように湛えていた。木の葉型に開いた秘裂の頂点で、真珠のようなクリトリスが包皮を脱ぎ捨て、キスを求めているかのようになり、震えながら、小さな身体を精一杯に伸ばす。こんな絶景を前にして、変だと思う方がどうかしている。

「でもでも、あたしの……毛って、カッコ悪いって、咲希ちゃんが……」

何かのイベントで着替えが一緒になった時にでも見られたのだろう。言われてみれば、栗色の恥毛は生まれたてのヒヨコのように薄く、ぼよぼよしていて不恰好かもしれない。しかし、童顔の梨奈には、それでちょうど、お似合いなくらい。

「カッコ悪くなんかないよ。梨奈らしくて、可愛いよ」

もしかして、弘樹の愛撫を拒否し続けていたのは、これがコンプレックスになっていたせいだろうか。咲希も、悪気はなかったに違いないが。

(そんなもの、俺が気にならなくしてやる)

貝肉のような淫裂に舌を伸ばし、ぬるっと、襲に溜まった愛蜜を舐め取った。舌の上に溢れるほどたっぷり溜め、一気に喉に流し込む。

「ああっ！ おにいちゃん!」

匂いと同様、甘酸っぱい味が口の中に広がる。美味とは言えない。しかし、これが梨奈の味と思うだけで、全身の血が沸騰したように熱くなった。のぼせ上がった頭で秘裂に濃厚なディープキスを挑み、舌全体で膣前庭をくまなく探索する。濡れた粘膜の中心に、小さな穴を見つけた。まるで自分から吸いついてくるような窪みの縁を舌の先でコチコチとくすぐると、敏感な梨奈の身体が「きゃうん！」と何度も何度も跳ね上がる。

(ここが……梨奈の入り口?)

膣口に舌先を差し込むが、わずかに口を開くだけで、それ以上先に進めない。輪ゴムのように強烈な肉孔の締めつけを突破しようと、先端を尖らせて強引に捻じ込む。ふと、小さな小さな膣口に自分のものが入るのだろうか、不安が頭をよぎった。

(って……俺は、梨奈に何をしようとしてるんだ……!?)

今更ながらに自分がしていることが怖くなる。それでも蜜の味を知ってしまった身体は

歯止めが利かない。早く妹とひとつになりたいと、下半身が急かしてくる。

「おに……おにいちちゃん！ ひっ……あッ！ そ、そんな奥までエッ!?」

——じゅぷ、ずずずずッ！ べろんっ！

膣口を扶る舌から逃れようとして、梨奈の両手が頭を押し返す。舌全体を使って小さな秘裂を舐め上げると、「ひゅわああああッ！」とひととき大きく仰け反って、ガクガクと震える太腿で弘樹の頭を挟み込んだ。

「は……はあ……ん……はあ、はああ……」

軽く達してしまったらしい。弘樹は服を脱ぎ捨て全裸になると、膝立ちで胸を跨いだ。紅潮して喘ぐ顔に何本もの髪が乱れかかり、唇の端からは、涎が一筋、つつ……と流れ落ちていく。ワンピースを押しつけ、はだけた胸は、荒い呼吸で大きく波打つ。しどけなく開いた脚。左の太腿には白い下着が絡みつき、まるで陵辱の後のようだ。

うっすらと開いた眼が、顔の上で脈打つペニスを捉えた。何度も見ているはずなのに、自分の身体にはない巨木の威容に、目を泳がせてうろたえる。しかし、それでも、好奇心に満ちた瞳が、次の展開を期待して濡れた。

もう服を脱がせるのももどかしい。一刻も早く、梨奈の中に入りたかった。ギチギチに固まったペニスを握り締めながらスカートの裾を払い、愛液と唾液で濡れた股間を露わにして、両脚の間に身体を割り込ませる。

「梨奈……」

弘樹の呼び掛けに、可憐な妹は、静かに長い睫毛を伏せた。

「あたしも……おにいちちゃんが欲しい……。いつでも、どこにいても、おにいちちゃんを感じられるように……おにいちちゃんを、梨奈に、くださ……い……」

ピトッと、性器同士を触れ合わせる。緊張で硬くなった梨奈にキスすると、途端に溶けた飴のようにふにやふにやになった。その隙を突いて、グッと腰を押し出し、肉槍の切っ先を膣口へ潜り込ませる。

「んく……く……く……く……あああああああああああああッ!!」

亀頭がぬるんと、濡れ肉の入り口に包まれた。先端がわずかにめり込んだだけで、眉間に皺を寄せて梨奈が呻く。だが媚肉の柔らかさ、温かいぬめりは、弘樹に精液が漏れてしまいそうな快感をもたらした。

「う……つく！」

セックスは真琴と経験したが、処女を奪うのは初めて。しかも梨奈のそれは、彼女とは比べ物にならない窮屈さ。額に脂汗を浮かべながら、ズズッ、ズズッと、少しずつ、慎重に、狭隘な肉トンネルを拡げてゆく。

「お………に、ちゃああん………」

さすがのように首に腕を巻きつけてきた切なげな妹の喘ぎが、弘樹の頭に血を昇らせた。頭の中がピンクに染まり、一気に腰を押し進める。

——ズンッ！

「かはっ!? は……あ……ンムウああああッ!!」

強烈な処女膜の抵抗を強引に突き破る衝撃が弘樹の腰にまで伝わった。小柄な身体からは想像できない、折れるかと思うほどの物凄い力で首にしがみついてくる。胸の下で、ブラジャーに包まれた豊かな乳房がぐにやりと潰れ、ぼろぼろと大粒の真珠のような涙を零し、激痛に耐えている。

「痛いのか?」

しかし梨奈は、ふるふると首を振り、力のない笑みを浮かべた。

「不思議なの……。痛いのに……すぐく、痛いのに……気持ち、いいの……」

それが嘘ではない証拠に、弘樹のものを受け入れている腰が、ゆつくりと動き始める。破瓜の血と愛液で滑りのよくなった肉筒で、愛する兄の肉棒を抜く。

「は、初めてなんだから、無理するなって!」

「ああ……何で? 動いちゃう。腰、どうして勝手に動いちゃうの!?!」

自分の身体の反応に戸惑いながら、腰を捻り込んできた。強烈な締めつけに、苦痛と快楽の狭間で弘樹の声も裏返る。処女とは思えない股間のうねりにペニスが蕩ける。

「そ、そんなにしたら、壊れちゃうって!」

「だって、だって動いちゃうの! あ、あ! あたし……ああああ……おにいちゃんを感じる……あたしの中に、おにいちゃんが……いっぱい……!」

クチャクチャと股間で鳴る粘着音が弘樹を狂わせた。妹の淫裂に抜き差ししながらブラ

の中に手を差し込んで、突き出された生乳房を掴み、ピンと尖った肉蕾を二本の指でクリクリ転がす。

「お、おっぱい……ちくび、そんなにいじっちゃああー！」

次第に喘ぎが大きくなり、狭い楽屋の中でこまりました。突き出された舌に吸いついて口を塞ぎ、深いキスで口腔を犯す。兄妹ならではの息の合った動きで腰をぶつけ合い、あれほど恐れていた禁断の快楽を貪り始めた。

「むひゅわあ、じゅるっ、お、おひいひゃん……んば！ おにいちゃん、あたし変！ なんか、なんか……も、ものすごく気持ちいいよお！」

単純に締めつけるだけだった梨奈の膣が、次第にウネウネと蠢き始めた。膣壁の無数の皺が、何人、何十もの少女の舌のように、愛液という名の唾液を纏わせながら、剛直肉棒を舐め回す。亀頭のカリと柔腔肉が擦れて、ゾクゾクするような快感に背筋が痺れる。

「ああ……俺、もうすぐ……！」

絶頂に近い。陰囊がせり上がり、射精の予感に亀頭が疼く。しかし。

（もつと……もつと深く……）

このまま終わりたいはなかった。梨奈とひとつになりたい。妹と溶け合いたい。弘樹は快感で力のコントロールが利かない身体に鞭打って、一旦ペニスを引き抜くと、楽屋の上等なソファに腰を降ろした。その膝の上へ、まるで幼女におしっこをさせるように、大股開きの身体を抱き上げる。

「なに……するの？」

快感に蕩けた顔の梨奈が、ゆらゆらと長い髪を揺らしながら振り向いた。弘樹は返事をする代わり、その肢体を、天を指して屹立する肉柱へと突き落とす。

「ひっ、ふああああああ!? お、奥、こんな奥、までええええええええええっ!!」

身体の最深部まで貫かれる衝撃に、硬直肉槍に串刺しにされる快感に、梨奈の背中海老反った。後頭部を弘樹の肩に預け、ガクガクと顎を痙攣させる。しかし下から激しく子宮口を突き上げられると、無意識のうちに腰がうねり始めた。自分を貫くペニスを軸にして、うねうねと、生々しい動きで白を捏ねる。

「おにいちゃんのオチンチン、あらひの中、あっちこっち当たって……ろ、ろうしてこんな……あらひ、あらひ、初めてなのに、こんなに感じて……やあ……は、恥ずかしい……恥ずかしいのに、ろうしてこんな……き、気持ちいいいいいいっ!」

——ぐっちゅぐっちゅ、じゅぶるっじゅぶるっ!

幼い腰が、横回転で肉棒を翻弄する。薄い貝肉のようなピンクの陰唇が、愛液という涎を肉幹になすりつけながら、ロングストロークの抽送で抜き上げる。

「あ……あ……アイドルが、こんな、気持ちよくなっちゃ……ら、らめえなの……」

「どこが? どこで気持ちよくなっちゃうのか言ってごらん?」

「んあああッ! お、おにいちゃん、イジワルだあ……。そ、そんなこと……アイドルが言ったら、らめ……あふっ……らめなのおっ!」

呂律が回らない妹があまりにも可愛らしくて、子供のように苛めたくなくなってしまった。

「アイドルが言っちゃダメなこと知ってるんだ？ ほら、言つて。梨奈が一番、気持ちいいところ。どこ？ 梨奈のナニが、気持ちいいの？」

腰を回転させながら、顔を伏せて首を振る。恥ずかしい言葉を口走ってしまいそうな羞恥に耐えかねて唇を噛む。

「お……おま……ら、らめえ！ やっぱり恥ずかし……ヒッ！」

淫語を催促する指先に乳首を摘み上げられて、細い肢体が小魚のように跳ね上がった。

「ンあん……あ……乳首だめ……そんなにいじったら、あたし……あ、ひゅあぁっ！ おまつ、おま○こ！ おま○こ、気持ちいい！」

「エツチだなあ。アイドルなのに、そんなこと言っちゃうんだ？ ほら、見てごらん」

細かい突きで小さな身体をユサユサと揺さぶりながら、顔を上げるように促す。正面を向いた梨奈の眼が、驚いて大きく見開いた。

「や……やあぁあ！ こ、こんなのダメえ！」

髪を振り乱して梨奈が狂乱する。壁に嵌め込まれたメイク用の大鏡が、背面座位で繋がる二人を大きく映していたのだ。上気して桜色に染まる大きな乳房。豆粒大に勃起している可憐な乳首。そしてM字に開いた破廉恥な股間で、蠢く処女の秘裂が兄の剛直を咥え込んでいるところまで、しっかりと。あまりにも恥ずかしい自分の姿に、梨奈の顔が沸騰したように紅くなる。半開きの口をガクガクと震わせる。



あの幼かった梨奈が、純真無垢だった妹が、セックスの快感により狂っている。濡れ
柔肉に勃起を抜かれ、尿意にも似た悦楽にブルツと全身が震えた。血の繋がりはないとはいえ、妹を犯している禁忌が、ありえないほどの快感でペニスを蕩かす。

「梨奈の膣、きつくて……でも柔らかくて……ああ俺……俺、もう……」

「あ、あたしも、何か変、なのっ。こんな感じ、初めて……あっ……はっ……。あ、あたし、初めてなのに……はああああ！ 飛んじゃう……飛んじゃうっ！」

パンパンと腰をぶつけ合う淫猥な音が、狭い部屋の中で幾重にも反響する。処女の濡れ肉に抜かれた肉棒が限界を迎える。射精してしまいう前に抜かなくてはと頭の片隅で思っているのに、身体がいうことを聞かない。快感の絶頂に向かって挿入を深める。

「俺、出ちまう！ 梨奈の膣に、なかに！」

「だ、出していいよ！ おにいちゃんの精液で、あたしの膣、いっぱい、してッ！」

「ああああ、ダメだ！ 抜かなきゃ……ああダメだ出る出る、出る！」

「あたしも、あたしも……あうん、あうん、おま、おま○こイク、おま○こイク……あたし……あたし……い、いきゅつ、いきゅうううううッ!!」

全身を桜色に染め、仰け反りながら一足先に梨奈が達した。絶頂膣肉がペニスを締め上げ、射精欲求にとどめを刺す。

「そ、それ、きつい、うぐはあっ！」

——ドクンッ！ ドクドクッ！ ドブルルルルルルウッ!!

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18歳ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

